

「善き隣人」としての妙好人

——ソローキンの利他主義研究の日本的展開——

長崎ウエスレヤン大学 吉野浩司

【1 目的】

地震をはじめとする自然災害、あるいは戦争や紛争・テロによる被害の報道がなされるたびに、ただちにその被害者たちへ手を差し伸べる支援活動が始まる。そうした支援の行為は、自らの日常の行為（仕事）をいったん停止せざるをえない。その意味では、利他的動機に基づく他者への行為である。しかし支援活動には、比較的短期で終わるものと、長期にわたって継続しなければならないものがある。困難なのは、後者の長期にわたる場合である。一旦は控えていた日常の行為（仕事）に立ち返らなければならない時期が、遅かれ早かれくるからである。これは現代における支援活動の困難を示す一例であろう。本報告の目的は、その困難さを克服することにある。この目的を果たすために、ソローキンが利他主義研究で例示した「善き隣人 (good neighbors)」を取り上げ、それと好対照となる妙好人といわれる人々の生き方を、継続的な支援活動のヒントとなりうる実践例とする。

【2 考察】

ソローキンの利他主義研究は、その独創的な意識構造論に特徴がある。人間の意識は、「生物的無意識」、「生物的意識」、「社会文化的意識」、「超意識」という5つの部分から成り立っている。本研究の関わりでいうと、「超意識」が、特に重要である。「超意識」に根ざした利他的行為であれば、継続的に行うことが可能となる（ソローキン『愛の方法と力』）。「超意識」とは、「人間における神的なもの」、「真、善、美の高尚なエネルギー」、「最高度の創造的才覚」などと表現されるものである。それを解明することは困難であるが、たとえば超意識に根ざした行為の実践例として、ソローキンは「善き隣人」を挙げている（ソローキン『利他愛』）。「超意識」は内容としては論じることは難しいが、その実践例を集めていくことで、徐々に明らかになっていくものである。

こうした超意識に根ざした行為は、日本でいうと「妙好人」に見出すことができるのではないだろうか。地方にうずもれていたはずの「妙好人」の善行は、鈴木大拙や柳宗悦らの功績により、一般人にも知られるようになった。「善き隣人」はキリスト教の概念であるが、妙好人は浄土真宗の篤信者のモデルとされる人々である。

キリスト教や仏教における超越者が、自分の苦難（原罪）を自ら引き受けてくれている。その引き受けてもらっている超越者の姿に気づいた人は、自らもその超越者の「似姿」として自らを擬する。その自らを超越者に擬した行為が、善き隣人や妙好人の利他的行為に他ならない。

【3 結論】

「善き隣人」や「妙好人」の利他的行為は、死ぬまで永続するものであった。なぜ、そのように長期的な支援活動が可能となったのか。彼らの行為から、ただちにその答えを引き出すことは難しいが、彼らの意識構造と実践例を明らかにすることで、そうした支援活動を継続的に行うためのヒントを提示することができる。

【文献】

- Sorokin, P.A., 1947, *Society, Culture, and Personality: Their Structure and Dynamics*, Harper and Brothers, 1961.
- , 1950 [2010], *Altruistic Love: A Study of American Good Neighbors and Christian Saints*, Kessinger Publishing, 1985.
- , 1954 [2002], *The Ways and Power of Love: Types, Factors, and Techniques of Moral Transformation*, Templeton Foundation Pr., 1977.
- 柳宗悦, 2004, 『妙好人論集』岩波書店.
- 菊藤明道, 2017, 『鈴木大拙の妙好人研究』法藏館.
- 鈴木大拙, 1972, 『日本的靈性』岩波書店.